

酒匂遺跡群

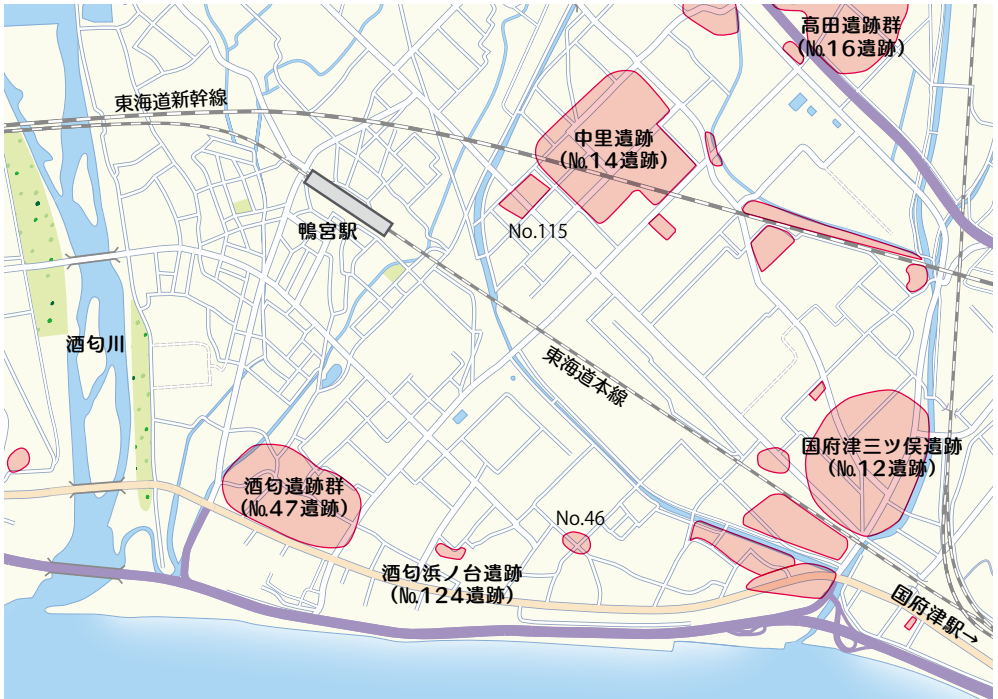
— 砂丘上に広がる酒匂川左岸の遺跡 —



小田原市教育委員会

例 言

- 1 本書は、散策しながら遺跡が学べるガイドブック「小田原の遺跡探訪シリーズ」として作成しました。今号は第11号として、小田原市酒匂に所在する酒匂遺跡群（小田原市No.47・124遺跡）を取り上げました。
- 2 本書の刊行は、平成27年度国庫補助事業である「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」の一環として行いました。
- 3 本書の作成に関しては、以下の諸氏・諸機関からご指導・ご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。（敬称略・順不同）
株式会社盤古堂、滝澤亮、小池聡、諏訪間順・鈴木一史（小田原市観光課）、星野和子・曾我勉（小田原市立図書館）
- 4 本書の作成は、小田原市文化財課三戸芽が担当者となり、同課大島慎一・内田文明・山口剛志・渋谷晃・佐々木健策・相川直史・渡辺千尋・飯山智久・土屋健作・下澤亜裕美・吉田千沙子・土屋了介が補佐しました。図版の作成には、武田博志の協力を得ました。写真の撮影は、小宮幸雄・武田博志の協力を得ました。



第1図 遺跡周辺位置図（1/25,000）

[表紙] 酒匂地区周辺航空写真（北から）（撮影：株式会社スカイサーベイ）

[裏表紙] 酒匂北川端遺跡第V地点4号溝出土東三河・西遠近江系土器

I 酒匂遺跡の立地と環境

1 酒匂川周辺の自然地形と立地

酒匂川^{さかわ}周辺は、足柄平野と呼ばれる沖積平野の末端の海岸線に沿って形成された砂丘上の微高地上に位置します。酒匂は、南は相模湾に臨み、西は鴨宮と、幾度となく氾濫を繰り返した酒匂川を隔てて網一色、北は中里、東は小八幡に接し、村の北を酒匂堰、西を下菊川が流れ、海沿いを東海道が通ります。

酒匂は東海道の足柄道と箱根道の分岐点に位置し、いにしえより多くの人や物が行き交う重要な場所でした（第3図）。酒匂の名は『吾妻鏡』^{あづまがみ}に登場し、源義経が平宗盛父子を護送した文治元年（1185）の記述によれば、「今夜、酒匂駅に着く」と記されます。このことから、平安時代末には東海道の宿場として成立しており、鎌倉からはほぼ1日の行程で到着できる重要な宿として位置づけられていました。現在の小田原市保健センター周辺には、源実朝の『金槐和歌集』^{きんかいわかしゅう}によると、鎌倉幕府の「浜辺御所」^{はまべのこしよ}という将軍の宿泊・休憩施設があったとされ、酒匂は小田原周辺における中心地のひとつでした。



写真1 東海道分間延絵図（画像提供：東京国立博物館）

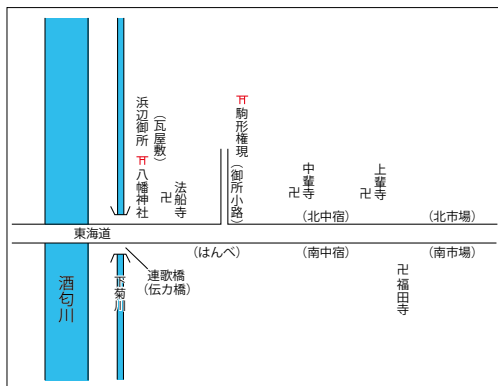
中世以降の酒匂は、文献等から宿場の存在が知られています。現在でも小字には宿場に関する地名の名残と考えられる「川端」「中宿」「市場」といった地名が残されています。

また、酒匂には、東海道に沿って西から法船寺、法善寺、大見寺、南蔵寺、上輩寺、長楽寺などの寺院や酒匂神社などの神社が現在でも多く存在しており、中世まで遡るものも多いとされています（第2図）。

2 周辺の遺跡

酒匂遺跡群（小田原市No47遺跡）の周辺は、酒匂川河口部の左岸に位置し、周知されている遺跡が比較的少ないですが、東には弥生時代末から古墳時代前期の竪穴住居跡などが出土した酒匂浜ノ台遺跡（No.124遺跡）や東方約2.2kmには弥生時代中期から古代の大規模な集落跡・墓域が形成された国府津三ツ俣遺跡（No.12遺跡）、相模湾砂丘微高地上に形成された小八幡遺跡（No.45・120・121遺跡）があります。

また、北方1.8kmには弥生時代の大規模な集落跡や墓域の形成された中里遺跡（No.14・115遺跡）があります。



第2図 鎌倉時代の酒匂宿概念図

3 発掘調査のあゆみ

小田原市内における最も古い人々の営みの痕跡は、旧石器時代まで遡ることができます。かつて、英国在住の博物学者N.G.マンローが早川及び酒匂川付近から旧石器時代の石器と類似した資料を発見し、明治41年（1908）に日本初の旧石器時代の遺物として学会に



第3図 平安時代末・鎌倉時代の西相模の交通路

報告したことは考古学の学史に残る出来事となりました。

近年、開発行為が酒匂地区でも増加しており、古くからの景観を失いつつありますが、昔の面影もいまだそこかしこで見られ、先人たちの営みを垣間見ることができます。

酒匂遺跡群では現在までに18地点を超える発掘調査が実施され、考古学的な情報の蓄積が進み、文献等だけでは知りえない地域の歴史が少しずつ明らかになってきました。

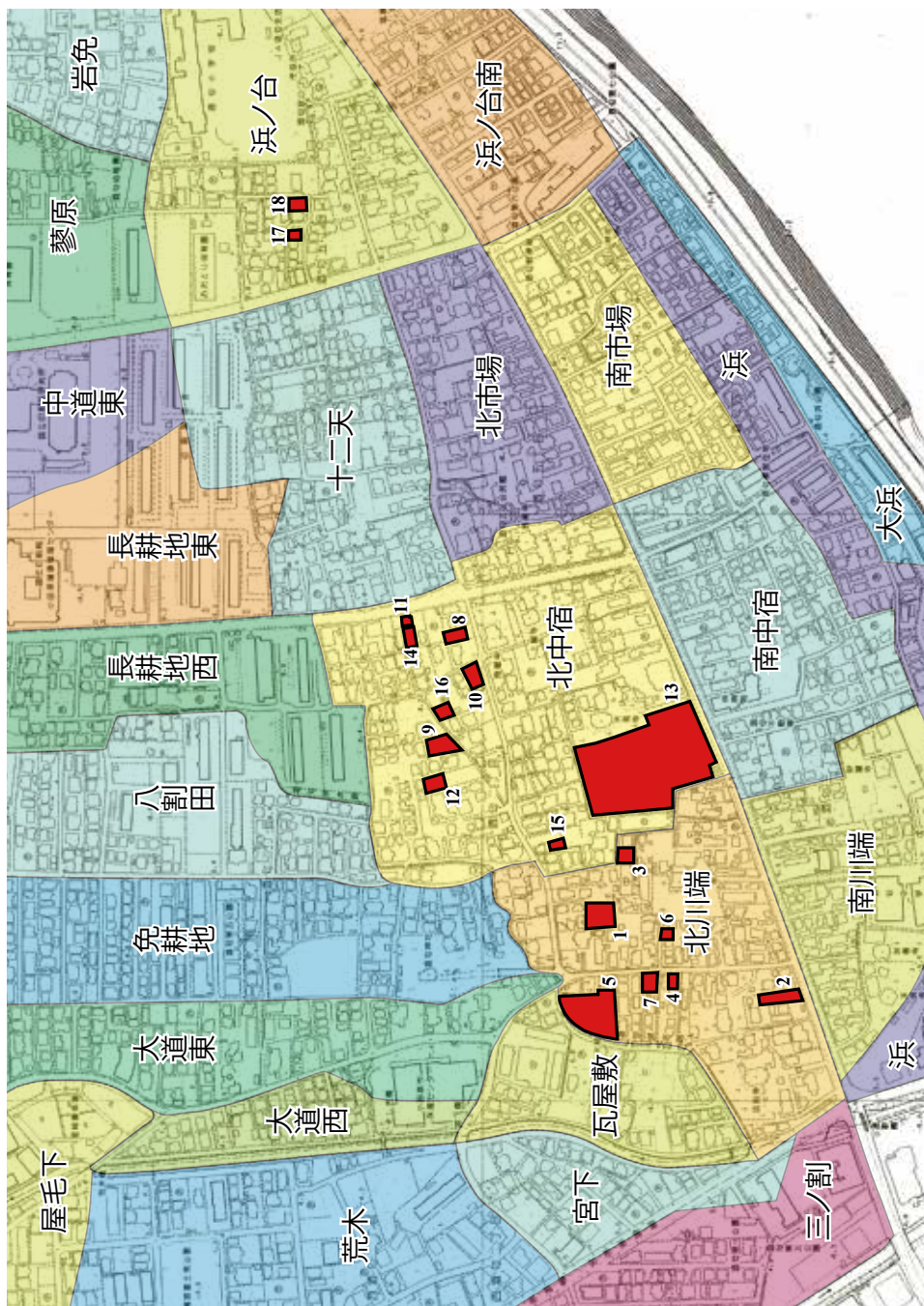
酒匂地区に広がる砂丘上の遺跡は、小字ごとに遺跡名が付けられ、酒匂北川端遺跡、酒匂北中宿遺跡、酒匂浜ノ台遺跡というように呼んでいます（第4図）。酒匂遺跡群については、昭和50年代後半より窪田蔵郎氏などにより江戸後期の羽口が鍛冶研究との関連の中で注目されてきました。その後、平成10年（1998）に最初の試掘確認調査が行われ、中世の地下式坑などが見つかりました。そして、平成16年（2004）以降には多くの地点で本格的な発掘調査が始まり、江戸時代の鍛冶に関する鉄滓廃棄土坑や、弥生時代末～古墳時代前期の竪穴住居跡、弥生時代後期の環壕などが見つかりました（表1）。また、平成25年（2013）に行われた酒匂北中宿遺跡第Ⅵ地点では、19世紀から幕末の酒席など、商家の廃棄行為を示す近世遺構群・遺物群が確認され、小田原宿以外の江戸期東海道の様相を考える重要な資料が見つかっています。

酒匂遺跡群の調査は、21世紀に入ってから実施されたものが大半です。報告書刊行のための整理作業を進めているものもあり、今後、より詳細な検討によって歴史解釈が変わる可能性もあるでしょう。

この冊子では、弥生時代末から近世、そして近代まで続く酒匂遺跡群の歴史について、現段階までの考古学的調査から少しずつ明らかになってきたことを紹介します。



写真2 酒匂川と足柄平野



第4図 本書で扱う酒匂地区周辺の発掘調査地点

No.	調査地点名	所在	調査年月日	検出遺構
1	酒匂北川端遺跡第Ⅰ地点	酒匂二丁目260-5外	1998.06.24	中世：地下式坑
2	酒匂北川端遺跡第Ⅱ地点	酒匂二丁目210-1外	2005.05.25-2005.06.29	中・近世：土坑58、溝10、ピット32、近代：井戸1
3	酒匂北川端遺跡第Ⅲ地点	酒匂二丁目282-1の一部	2005.10.21-2005.11.15	古墳～平安時代：住居跡4、土坑5、溝2、竪穴状遺構1、中・近世：土坑1、溝15、硬化面3、ピット9
4	酒匂北川端遺跡第Ⅳ地点	酒匂二丁目240-7	2008.04.11-2008.06.20	近世：石列1、石相水踏1、廃淳土坑1、土坑25、柱穴67、硬化面2、井戸1
5	酒匂北川端遺跡第Ⅴ地点	酒匂二丁目251(の一部)外	2009.05.07-2009.06.09	古墳時代：古墳周溝、中・近世：土坑、溝状遺構
6	酒匂北川端遺跡第Ⅵ地点 (試掘)	酒匂二丁目271-3、273-5	2012.04.18	古墳後期～奈良・平安時代：土坑、竪穴状遺構
7	酒匂北川端遺跡第Ⅶ地点 (試掘)	酒匂二丁目243-1	2013.08.13	中・近世：土坑、柱穴
8	酒匂北中宿遺跡第Ⅰ地点 (試掘)	酒匂二丁目332-3	2004.08.27	奈良・平安時代：土坑2
9	酒匂北中宿遺跡第Ⅱ地点	酒匂二丁目307-1、2、3	2008.04.15-2008.06.06	古墳前期：溝状遺構4、土坑11、柱穴28、奈良・平安時代：土坑3、柱穴9
10	酒匂北中宿遺跡第Ⅲ地点	酒匂二丁目313-2、3	2010.02.08-2010.03.30	古墳前期～古代：住居跡、溝状遺構、土坑、ピット
11	酒匂北中宿遺跡第Ⅳ地点 (試掘)	酒匂二丁目331-6	2010.06.30	古墳～奈良・平安時代：包含層
12	酒匂北中宿遺跡第Ⅴ地点	酒匂二丁目305-5、6	2010.07.28-2010.08.26	近世：掘立柱建物、土坑、ピット、古代：土坑、溝状遺構、古墳時代：竪穴建物
13	酒匂北中宿遺跡第Ⅵ地点	酒匂二丁目374-1	2013.05.07-2013.08.23	古墳後期～奈良・平安時代：竪穴住居2、掘立柱建物跡11、土坑、柱穴、中世：溝状遺構2、土坑、柱穴、近世：竪穴状遺構13、池状遺構1、溝状遺構9、土坑、柱穴
14	酒匂北中宿遺跡第Ⅶ地点	酒匂二丁目331-13、14	2013.07.11-2013.08.28	古墳後期～奈良・平安時代：竪穴住居跡9、土坑2、溝3、柱穴47、中近世：集石1
15	酒匂北中宿遺跡第Ⅷ地点	酒匂二丁目288-1、8	2015.04.30-2015.07.10	弥生後期～古墳前期：竪穴住居跡13、土坑7、ピット17、焼土1、古代～中世：土坑14、ピット13、粘土集4、焼土2
16	酒匂北中宿遺跡第Ⅸ地点	酒匂二丁目314-3、7、12の一部	2015.09.08-2015.10.28	古墳前期：竪穴住居跡7、奈良・平安時代：掘立柱建物跡1、溝1、古墳前期～奈良・平安時代：土坑23、ピット2
17	酒匂浜ノ台遺跡第Ⅰ地点	酒匂五丁目570-6、7	2003.07.17-2003.07.28	古墳前期：竪穴住居跡1、ピット1
18	酒匂浜ノ台遺跡第Ⅱ地点	酒匂五丁目571-2	2011.03.03-2011.04.08	古墳後期～奈良・平安時代：土坑8、柱穴2、ピット1、古墳時代前期：竪穴住居跡2、竪穴状遺構1、溝状遺構2、土坑3、ピット4

表 1 酒匂地区周辺の発掘調査地点

Ⅱ 酒匂遺跡群に広がるムラ

1 発掘された弥生時代の環濠かんごう（酒匂北川端遺跡第Ⅴ地点の調査）

本格的な水稲耕作がはじまった弥生時代は、集落の周りにしばしば環濠と呼ばれる溝が作られ、居住域と墓域を明確に区別するようになった時代です。

小田原市内では、弥生時代前期末～後期の遺跡が確認されています。その多くは丘陵部やその縁辺部に分布していますが、沖積低地においても、酒匂川左岸に位置する中里遺跡や森戸川右岸の国府津三ツ俣遺跡などで集落と方形周溝墓からなる墓域があわせて確認されています。弥生時代中期中葉の中里遺跡は、低地へ進出している本格的な集落としては神奈川県内でも最古の例の一つですが、須和田式土器という在地の特徴を持つ土器と東部瀬戸内地方の土器が共伴していることから、遺跡の成立をめぐる全国の注目を集めています。

酒匂北川端遺跡第Ⅴ地点の調査では、弥生時代後期の溝状遺構が見つかりました。



写真3 酒匂北川端遺跡第Ⅴ地点で見つかった「環濠」(小池・渡井2013)

この溝は、幅が約6～7m、深さが2.5mで、断面は上部が大きく開いたV字形になっており、その形態的特徴から、弥生時代の集落を囲う「環濠」であると考えられています。溝の中からは、弥生時代後期の甕、壺、鉢、高坏などが出土しています。これらの遺物には、東海地方の西遠江地域や東三河地域に系譜をたどれるものがあり、土器組成として見ると、在来系土器を含むものの、多系統に及ぶ外来系の土器型式で構成されるという複雑な様相を呈していました。

これらの外来系の特徴を持つ土器が、環濠と考えられる遺構から出土したことで、酒匂周辺には西遠江や東三河に関連する人々が造営したと考えられる集落が存在することが明らかになりました。



写真4 環濠の遺物出土状況（小池ほか2013）



写真5 脚付壺出土状況（小池ほか2013）

2 弥生文化の東西交流

近年、発掘調査事例の蓄積によって、千代台地まで含めた酒匂川流域の弥生時代後期の集落は、駿河や中部高地・東西遠江・東三河など他地域の影響を強く受けて形成されたということがわかってきました。

例えば、酒匂北川端遺跡第V地点よりもやや古い段階の弥生時代後期前葉の環濠が



写真6 出土した高坏（諏訪問ほか2014）



写真7 溝状遺構（環濠）出土遺物（写真：(株)盤古堂）

発見された^{あたごやま}愛宕山遺跡第Ⅱ地点（小田原市城山）では、東遠江・駿河地域からの搬入品やその影響を受けた土器が出土しています。これは、酒匂川の右岸から左岸へ段階的に外来系文化が流入してきた様子、つまり弥生文化の東西交流を示しています。

比較的距離の近い中部高地南部や駿河だけでなく、さらに西に位置する西遠江や伊勢湾沿岸の土器が酒匂川流域の弥生時代後期集落から出土するということは、頻繁な人の行き来があったことが考えられ、土器などの物品交換の拠点の一つとして弥生時代においても、この地域は重要な役割を果たしていたのでしょう。



写真8 在地系と外来系が交る土器組成

3 古墳時代の集落の広がり

古墳時代になると、足柄平野においては千代や永塚、国府津など酒匂川左岸に古墳時代前期の墳墓が作られました。これらの古墳は、日常生活空間である居住域と近接する形で作られたということが近年の千代台地の発掘調査などでわかってきました。

酒匂遺跡群では、まだ古墳は見つかっていませんが、発掘調査によって古墳時代前期から古墳時代後期までの竪穴住居跡を伴う集落の調査事例が蓄積されつつあります。



写真9 酒匂浜ノ台遺跡第Ⅰ地点（諏訪間2007）



写真10 酒匂浜ノ台遺跡第Ⅰ地点出土土器



写真11 酒匂浜ノ台遺跡第Ⅰ地点出土土器



写真12 酒匂北中宿遺跡第Ⅲ地点4号住居跡
遺物出土状況（佐々木ほか2010）



写真13 酒匂北中宿遺跡第Ⅲ地点3号住居跡
カマド（佐々木ほか2010）

例えば、酒匂浜ノ台遺跡第Ⅰ地点の調査では、古墳時代前期の竪穴住居跡とまとまった土器群が出土しました（写真9～11）。また、酒匂北川端遺跡第Ⅲ地点では、古墳時代前期から古代の竪穴住居跡が4軒見つかっており（写真12～16）、酒匂北中宿遺跡第Ⅷ地点では、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居が13軒見つかったほか、多数のピットや遺物集中がみられ、引き続き集落の形成がなされたことがわかります。酒匂北中宿遺跡第Ⅶ地点では、古墳時代後期から奈良・平安時代の住居跡が9軒重複した状況が見つかり、相模形坏なども出土しています。酒匂北中宿遺跡第Ⅸ地点でも、それほど広くない範囲の調査で古墳時代前期の住居が7軒切りあっている状況が検出されました。

このように、近年、南蔵寺の北側を東西に走る道の周辺で調査の事例が増えてきており、古墳時代前期から古墳時代後期の竪穴住居跡が重複していることから、この周辺に展開する集落の研究が今後期待されます。



写真14 酒匂北中宿遺跡第Ⅲ地点4号住居跡
遺物出土状況（佐々木ほか2010）



写真15 酒匂北中宿遺跡第Ⅲ地点4号住居跡
出土土器



写真16
酒匂北中宿遺跡第Ⅲ地点
3号住居跡出土土器

保健センター



浜辺御所跡

「浜辺なる
前の川瀬を
逆水の
早くも今日の
暮れにける哉」



酒匂神社

酒匂北川端遺跡の
西遠江系土器



弥生時代の
環濠集落



下菊川

酒匂北中
住居

法善寺

法船寺

鉄滓

酒匂中学

保健センター入口

連歌橋

酒匂中学



酒匂遺跡群 散策マップ



Ⅲ 交通の要衝として栄えた酒匂 (古代から近世へ)

1 酒匂川を渡って

酒匂北中宿遺跡第Ⅵ地点の発掘調査では、奈良・平安時代の掘立柱建物跡群が整然と構築されている状況が見つかりました。調査の範囲外に建物は続いているため、建物の規模は正確にはわかりませんが、3間×4間の規模で布堀状の基礎を持つものもありました。この掘立柱建物跡群と同時代と考えられる9世紀後半の堅穴住居跡も見つかっており、この集落は古東海道のルートを考える上で重要な発見となりました。

鎌倉時代の紀行文「十六夜日記」^{いざよひにつき}では湯坂路を經由して箱根山中を越え、酒匂川^{まりこ}（丸子川）を渡って酒匂宿に辿り着いています。この宿場が当時は足柄峠越えと箱根越えの2つの道の分岐点になっていたことが窺えます。古代には箱根山を迂回していた街道が、後に箱根山の中を抜けてくる道へと変遷し、その2つの道が合流する東側の宿場が酒匂であった、ということが言えるでしょう。



第5図 古代の掘立柱建物跡群（小池2014）

江戸時代になると、五街道を始めとする交通網や宿場など交通施設の整備により、物流や旅行が活発に行われるようになりました。古来より暴れ川として地域住民の生活に脅威を及ぼしてきた酒匂川は、東海道を分断する障害の一つでした。

酒匂川には、10月5日から3月5日の間は仮橋が架けられました。それ以外の期間に川を渡るためには、「歩行^{かち}わた^渡し」という手段がとられました。また、日没以降や水位の高い時の川越しは禁止され、時により20日から1か月の間、旅行者は最寄の宿場や^{あい}間の村に引き返



写真17 酒匂北中宿遺跡第Ⅵ地点全景（西から）



写真18 中世の方形区画 95号遺構（南東から）



写真19 近世廃棄土坑出土遺物(1)(写真:(株)盤古堂)



写真20 近世廃棄土坑出土遺物(2)(写真:(株)盤古堂)



写真21 近世廃棄土坑出土遺物(3)(写真:(株)盤古堂)



写真22 近世廃棄土坑出土遺物(4)(写真:(株)盤古堂)

さなくとはいけませんでした。そのため、酒匂川近くの村では旅行者を受け入れるための宿などが栄えました。

2 発掘された宴会の様子

酒匂北中宿遺跡第Ⅵ地点では、中国産青磁・白磁や常滑窯系片口鉢・甕など13～14世紀の遺物が出土する溝状遺構(95号遺構)による方形区画が見つかったことが注目されます。また、近世の遺構としては、江戸時代初期から18世紀初頭の池状遺構や、18世紀後半から幕末の廃棄土坑が見ついています。この廃棄土坑からは、肥前系染付飯碗・皿・徳利など酒席に関係する食器類がまとまって見ついています。中には、朱文字で「酒紀の国や」、「酒 車」などと書かれ焼継ぎ痕の顕著なものもあります。

このような状況から、この近辺には江戸時代の東海道に面した屋敷地があり、酒匂川を渡るために酒匂に寄った旅行者などが酒を酌み交わす宴会が行われたであろう賑やかな姿が見えてきます。

酒匂北中宿遺跡第Ⅵ地点の調査成果は、小田原宿以外の江戸時代の宿場が当時どのような姿であったのか窺うことのできる重要な発見となりました。

3 千代寺院跡と同じ型の瓦が見つかる

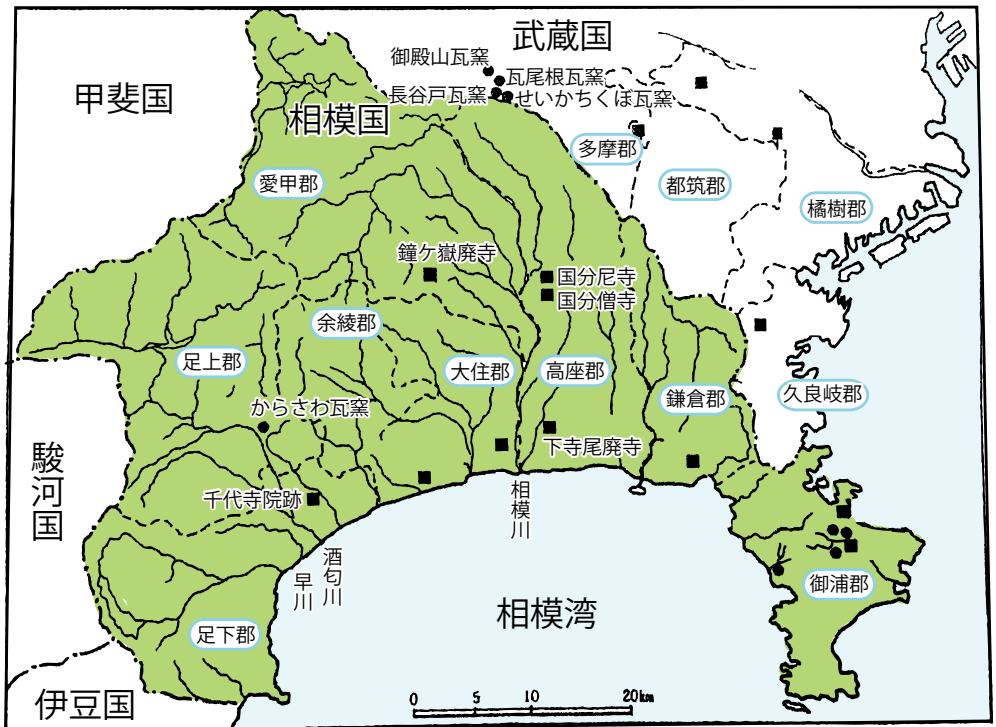
酒匂でもう一つ注目される点に、市内千代寺院跡や厚木市鐘ヶ嶽廃寺で見つかった
いる古代瓦と同じ型（御殿山瓦窯）で作られた瓦が出土していることがあります。古
代の瓦は、拠点となる古代寺院を中心とした瓦作りが行われ、その影響を受けた寺院



写真23 酒匂北中宿遺跡第Ⅵ地点出土瓦 (写真: (株)盤古堂)



写真24 千代寺院跡の瓦

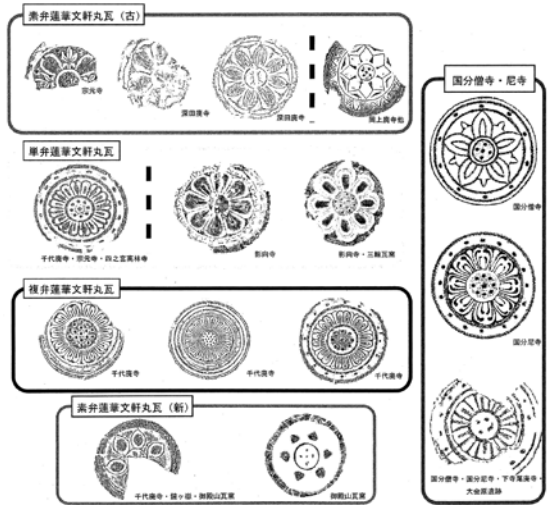


第6図 神奈川県域の古代寺院と瓦窯の分布 (國平2010を元に作成)

は同範瓦を使用するなど、同じ文様意匠を用いる傾向が全国的にあります。瓦の文様は、粘土を型に填めて作られますが、離れた場所にある窯の製品が同じ型を用いて作られたことを示す場合があります。この文様系統がどのように伝播しているのか分析することで、古代寺院の関係性を探ることができるため、注目されています（第7図）。

千代寺院跡、そして酒匂で出土した古代瓦は「素縁素弁六葉蓮華文軒丸瓦」と呼ばれるもので、9世紀

後半から相模国内で展開します。千代寺院跡は、8世紀初頭に地元の豪族によって造営され、8世紀末から9世紀前半に修復された後、10世紀前半まで存続した寺院と考えられています。千代寺院跡は、長年の間謎に包まれていましたが2006（平成^き18）年に千代字南原で行われた千代南原遺跡第X X IV地点で、主要建物の基礎（基壇^{だん}）跡が検出され、初めて寺院に関連した遺構の発見として、千代寺院跡の実態解明の大きな一歩となりました。なぜ酒匂の地で千代寺院跡と同範の瓦が見つかったのかという理由はまだわかりませんが、今後酒匂周辺の古代史が注目されます。



第7図 軒丸瓦の文様系統（高橋香2015より）

4 酒匂地区の石造物

中世の酒匂地区周辺の姿は、発掘調査の成果だけではまだまだ事例が少なく、わからないことが多くあります。しかし、酒匂地区には中世まで遡る寺院や神社があるほか、年代の記された五輪塔や宝篋印塔などの石造物が残っており、これらの資料や文献、そして今後調査されるであろう中世遺跡によって、酒匂宿の姿が将来的には見えてくると推測されます。

中世まで遡る寺院のある酒匂には、市内にある個人墓のうち、年代を記した最も古い石塔が現存しており、小田原市指定重要文化財として指定されています。中世の石塔は、供養塔婆の意味を持っており、死者を埋葬した場所に建てられる墓標の役割も

果たしていました。大見寺にある小嶋家の宝篋印塔・五輪塔（写真25～27）は、中世酒匂郷の小代官を務め、江戸時代に名主・組頭役を務めた酒匂の旧家小嶋家の祖先の墓です。大見寺の墓地に3基あり、鎌倉時代末期以降の石塔の特色を色濃く残している貴重な資料となっています。

また、酒匂地区には道祖神が旧道沿いに8か所残っており、信仰の姿を偲ばせます。



第8図 酒匂地区の道祖神の分布



写真25 徳治3年（1308）銘の宝篋印塔



写真26 天文21年（1552）銘の宝篋印塔



写真27 天正2年（1574）銘の五輪塔

IV 発掘された鉄づくりの痕跡

1 江戸時代の「酒匂鍛冶分」

酒匂周辺には、『新編相模国風土記稿』によると、元禄年間（1688～1704）に酒匂村より分かれた「酒匂鍛冶分」という鍛工を職とする42戸が存在したとされます。

酒匂北川端遺跡第IV地点の調査では、約1,800kgもの大量の「鉄滓」と呼ばれる鍛冶の際に生じる不純物の塊が17～18世紀の土坑にまとめて廃棄されている状況が見つかりました（写真28）。ここで見つかった鉄滓は、丸い炉の底に溜まって形成されたため、底が丸く、その形から「椀形滓」とも呼ばれるものでした（写真29）。鉄滓の出土は、周辺で鉄づくりが行われた証拠となります。

酒匂地区は、酒匂川や相模湾にも近く、絵図等には木々も描かれており、製鉄原料となる砂鉄や燃料となる木材を容易に手に入れることのできる場であったのでしょうか。これまでの調査では、農耕具などの鉄製品や鍛冶に必要な炉などは見つかっていません。しかし、酒匂北川端遺跡第IV地点で出土した大量の鉄滓は、近世酒匂の鍛冶集落の存在を示す証拠として重要だといえるでしょう。

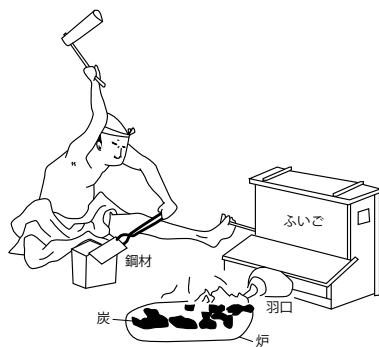


写真28 酒匂北川端遺跡第IV地点鉄滓出土状況

2 鉄づくりの工程

酒匂北川端遺跡第IV地点で見つかった鉄滓は、どのようにして生じたものなのでしょう。

日本列島における鉄生産の開始時期については諸説ありますが、弥生時代には鉄素材を輸入に頼りながら国内で鉄器の加工・生産が開始され、古墳時代後期には本格的な鉄生産が始まったと考えられています。鉄を高温に熱し、思い描く製品を作り上げるためには、非常に高度な技術と複雑な工程が必要とされ



第9図 鍛冶の様子（イメージ）

ます。

鉄づくりは大きく二つの工程に分けられます。原材料から不純物を排除して鉄素材をつくる工程と、鉄素材から製品を形作る工程です。採取された砂鉄や鉄鉱石などの原材料には、酸素やチタン、カルシウムなど鉄以外の不純物が含まれているため、炭素とともに高温で熱して還元させることにより、鉄塊と不純物（鉄滓）、二酸化炭素に分離します（第10図）。

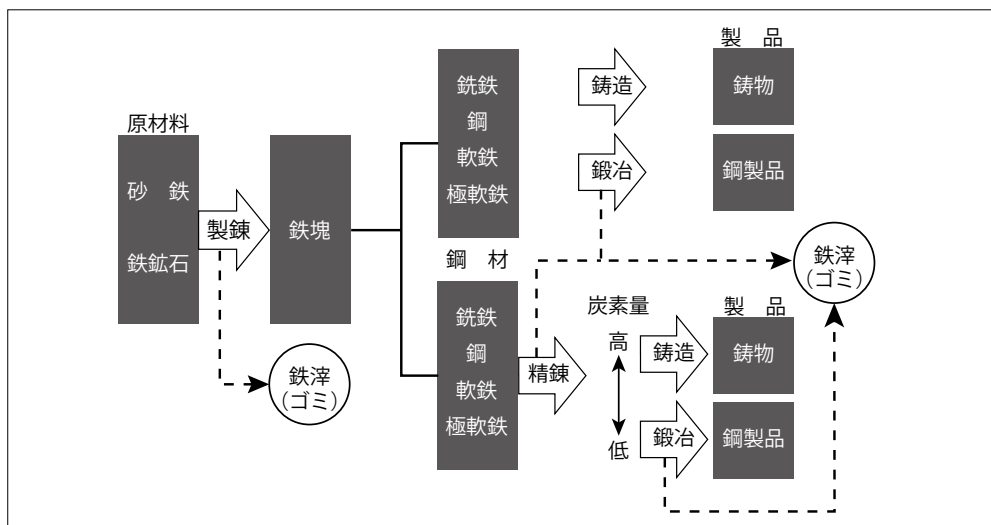
製錬された鉄塊から不要な不純物を叩き出し、製品に適した鋼材を作るため炭素含有量を調整する工程として精錬鍛冶があります。この鋼材をもとに製品を加工・成形する工程が、鋳物の場合は鋳造であり、鋼製品の場合は鍛冶となります。

酒匂北川端遺跡第Ⅳ地点で出土した多量の鉄滓は、その形状から鉄塊を精錬した際に生じたものの可能性が考えられます。

3 近世以前の鉄づくり

酒匂地区における鉄づくりの痕跡は江戸時代に限りません。酒匂北中宿遺跡第Ⅴ地点の調査では、古墳時代前期の遺構からも鉄滓が出土しています。

小田原市内では、千代台地に広がる千代南原遺跡第Ⅳ地点において関東最古級の鍛冶関連遺物が複数見つかっています。周辺の千代吉添遺跡や永塚北畑遺跡などでも、



第10図 鉄づくりの一例

羽口の破片が出土していることから、千代台地では鍛冶工房が安定的に営まれたと考えられています。さらに、千代台地の遺跡から出土した鉄滓や羽口などの鍛冶関連遺物は、鉄が半熔融状態となるほど高温に熱した痕跡を残していることから、一定水準の技術と知識を持った鍛冶工人がいたことがわかります。

また、永塚北畑遺跡では玉作りに関連する遺物が出土していますが、玉作りの工程などには鉄製工具を多く用いることから、これらに関連した遺物の発見は鍛冶技術とのつながりを間接的に示す証拠となります。本格的な鍛冶技術を習得するためには、素材の流通はもちろん、専門知識・技術を習得した鍛冶工人との交流が必要とされます。さらに、鍛冶技術の水準を保つためには頻繁な鉄製品製作の経験が求められます。鉄滓や羽口などは、鉄づくり全体の中でみると遺跡に偶然残った痕跡のごく一部に過ぎず、鉄滓に関していえば、工程の中で生じた不純物の塊ですが、鍛冶工房の存在だけでなく周辺他集落との交流をも示す遺物として注目されるでしょう。

このように、酒匂北中宿遺跡第V地点で出土した古墳時代前期の鉄滓は、断片的ではありますが、千代台地や永塚で営まれた鍛冶工房とのつながりを示す可能性がある考古学的な証拠の一つであるといえるでしょう。現時点では、酒匂において古墳時代前期の鍛冶関連遺構は見つかっていませんが、今後の調査の進展によっては、足元に眠る鍛冶の痕跡が発見される可能性もあるでしょう。



写真29 酒匂北川端遺跡第IV地点出土碗形滓



写真30 酒匂北川端遺跡第IV地点
出土した羽口



写真31 古墳時代前期鍛冶関連遺物と鉄製品
(諏訪問ほか2014)

VI 湘南随一の近代リゾートへ

1 近代のリゾート旅館の開業

明治末期から大正時代にかけて、鉄道開通を機に増加した遊覧客の避暑地として小田原の海浜ではリゾート旅館が広い範囲で数多く誕生しました。国府津では、駅前という利点を生かして「蔦屋」や「国府津館」が早くから繁盛し、明治21年（1888）9月2日に御幸の浜に開業した「鷗鳴館」や、明治24年（1891）8月12日に酒匂で開業した旅館・貸別荘兼料亭「松濤園」をはじめとした全面的にリゾート性を売り物にした旅館が皇族や名士・文人の来遊などで賑わっていたとされます。『小田原案内記』には、「松濤園といふ料理店あり、数軒の貸別荘を設け、又海水浴場を設く、避寒避暑共に便なり」と書かれ、小田原の風光明媚で温暖な土地が多くの人に知られました。

現在の酒匂三丁目国道1号線沿い、杏林堂クリニックのあたりに門があったとされる「松濤園」は、酒匂の大地主川辺家の5代目当主が海岸に植林した10万本の松林を9代目当主川辺段右衛門が活用して開設したものでした。当時は湘南随一の避暑地と称され、茅葺屋根の田舎家風に仕立てられた貸別荘が好まれて、皇族などの長期静養や避



写真32 松濤園の門[相州酒匂海岸松濤園]絵葉書（大正時代）

暑に利用されました。明治45年（1912）2月11日には徳川慶喜が松濤園に滞在し、曾我へ観梅に出かけたという記録も残っています。現在は住宅街となり、当時の姿は残された絵葉書（写真32）などでしか知ることができませんが、昭和の初め頃まで国府津から小田原に至る海岸部には大勢の避暑客が詰めかけ、酒匂にも次々と別荘が設けられるようになったといわれています。その証拠の一つとして、明治45年（1912）2月21日付の横浜貿易新報に書かれた記事に、「足柄下郡酒匂村、国府津間は七・八年來、別荘を新築するもの多く、また諸所に貸別荘ありて、ほとんど小田原以上の別荘地なるが、近ごろこれらの別荘は全部満員にて、ひいて酒匂の松濤園、国府津の瑞松園等も滞在客充滿しており、国府津海岸の貸別荘は、普通貸家まで避暑客詰めかけおり、したがって同村各方面も景気ひきたち來たれりか」とその繁盛ぶりが書かれています。

2 酒匂周辺の別荘と考古学

現在の小田原市保健センターの北方から養魚場にかけて、酒匂大道の両側には数千坪の「三望園」という田舎風の別荘が大正期にありました。これは、国産初の汽車製造で財を成すとともに日本野球の創始者でもある平岡熙（吟舟）^{ひらおか}（1856-1934）（写真33）が、政財界の知友に遊びの場所として提供したものでした。大正8・9（1919・20）年頃にはここの広い釣堀（現在の星崎養魚場より南側）で富士山を背景に釣り魚競技会が開かれ、実業家仲間や酒匂周辺の地元の漁師も招待したことで有名です。その他、酒匂小学校で体操教育に尽力した杉村虎一や音楽教育を推進した東京音楽学校長の伊澤



第11図 酒匂周辺の明治・大正期の別荘所在地
（川瀬氏の原図（小田原市立図書館蔵）を元に作成）



写真33 20歳頃の
平岡熙（吟舟）
（提供：（財）野球体育博物館）

修二の別荘などが酒匂にあり、近代日本の礎となる有力者が多く集まりました(第11図)。

現在、明治・大正期に栄えた別荘地の痕跡を目にすることはできませんが、発掘調査を行う過程で地中からその片鱗を見ることができる場合があります。例えば、酒匂北川端遺跡第V地点から出土した近代遺物の中には、「耕牧舎」の文字が読める牛乳瓶があります(写真34)。「耕牧舎」は、茶人として知られ小田原の板橋に広大な掃雲台を造営した三井物産の益田孝(鈍翁)が渋沢栄一と箱根の仙石原に共同設立した牧場です。明治13~37年の期間しか運営されなかったため、年代のわかる遺物として重要です。さらに、野球のボール・バット・グローブがデザインされた小型ガラス瓶も出土しています(写真35)。正確な年代は不明ですが、ガラスの特徴から近代の遺物だと考えられます。日本野球の創始者である平岡熈の別荘の近くで行われた調査でこのような野球をイメージした製品が出土するということは、何か関連があるのかと考えるにはいられない、興味深い資料です。

また、「酒匂ビール」という地ビールが1888~89年の間で製造されたという記録がありますが、その実態はよくわかっていません。近代において政財界の著名人が交友を図っていた場であり、避寒避暑客で繁盛した別荘地としての酒匂の状況を考えると、文献史料としては「酒匂ビール」が何者かわからなくなってしまっても、この謎にまつまれたビールの空き瓶が土の中から見つかるかもしれません。

このように、明治以降の近代の歴史は、発掘調査では見過ごされてしまいがちですが、より具体的で色鮮やかな郷土史を描くためにはガラス瓶をはじめとした出土遺物などの物質文化研究の寄与するところは大きいといえるでしょう。



写真34 「耕牧舎」の牛乳瓶とガラス製品



写真35 酒匂北川端遺跡第V地点出土ガラス

時代区分		主なできごと	本書に登場する事柄	
旧石器時代		箱根火山の爆発的噴火		65000年前
	後期 草創期	細石刃が日本列島全体に広まる 土器・石鏃の使用が始まる	マンローが酒匂川で石器を発見？	16000年前
縄文時代	早期	定住化の進行 気候温暖化による海水面上昇（縄文海進）		11500年前
	前期	羽根尾貝塚がつくられる		
	中期	東日本で環状集落がつくられる 久野一本松遺跡の環状集落		5500年前
	後期	祭祀具の発達		4500年前
	晩期 前期	水稻耕作の本格的な開始		
弥生時代	中期	中里遺跡の出現 奴国王、後漢光武帝より金印を受ける	酒匂北川端遺跡第Ⅴ地点の環濠集落	57
	後期		酒匂浜ノ台遺跡第Ⅰ地点 酒匂北中宿遺跡第Ⅷ地点	
古墳時代	前期	前方後円墳の築造開始		
	中期	仏教伝来		538
	後期	久野古墳群	酒匂北川端遺跡第Ⅲ地点 酒匂北中宿遺跡第Ⅷ地点	
古代	飛鳥時代	大化の改新 千代寺院跡の造営	古代瓦	645
	奈良時代	平城京へ遷都		710
	平安時代	平安京へ遷都		794
中世	鎌倉時代 南北朝時代 室町時代	源頼朝が征夷大將軍に任じられる	「浜辺御所」、酒匂宿	1192
	安土桃山時代	小田原城が築城される 小田原城総構の完成 豊臣秀吉の小田原攻め	小嶋家の宝篋印塔・五輪塔	1590
	江戸時代	江戸幕府が開かれる 富士山宝永の大噴火 ペリー来航	酒匂鍛冶分 酒匂北中宿遺跡第Ⅵ地点	1707 1853
近・現代	明治 大正 昭和	明治改元、五箇条の誓文の公布 太平洋戦争終結	別荘地として繁盛	1868 1945

文 献

本書を作成するにあたり、引用または参考にした主な文献を掲載しました。酒匂遺跡群をさらに詳しく知りたい方は、参考にしてください。

- 國平健三ほか 2008 『瓦が語るかながわの古代寺院』 神奈川県立歴史博物館特別展図録
- 小池 聡ほか 2013 『酒匂北川端遺跡第Ⅴ地点』 株式会社盤古堂
- 小池 聡 2014 「酒匂北中宿遺跡第Ⅵ地点」『平成26年小田原市遺跡調査発表会』 発表要旨集、小田原市教育委員会
- 佐々木健策ほか 2010 「酒匂北中宿遺跡第Ⅲ地点」『平成22年小田原市遺跡調査発表会』 発表要旨集、小田原市教育委員会
- 桜井準也 2006 『ガラス瓶の考古学』 六一書房
- 諏訪間順 2007 『酒匂浜ノ台遺跡第Ⅰ地点』 小田原市文化財調査報告書第143集、小田原市教育委員会
- 諏訪間順ほか 2014 『いにしへの小田原～遺跡から見た東西文化の交流』 平成26年度小田原城天守閣特別展、小田原城天守閣
- 高橋 香 2015 「神奈川県内の瓦の変遷」『相模国を創る一古代の役所と寺院』 平成26年度神奈川県考古学会講座

小田原の遺跡探訪シリーズ11

酒匂遺跡群

—砂丘上に広がる酒匂川左岸の遺跡—

平成28年3月25日 印刷

平成28年3月25日 発行

編 集 小田原市教育委員会

発 行 〒250-8555 小田原市荻窪300番地

電 話 0465-33-1715

<http://www.city.odawara.kanagawa.jp>

E-mail:bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp

印 刷 株式会社アルファ